

真宗教判論の一考察

池田 真

一 はじめに

歴史学者の家永三郎氏によれば、親鸞においては經典の文字を読み替えることはできても、經典の權威を無視しえず、「この独創的思想家をしても大無量寿經の文字よりする演繹の方法を断念する能はざらしめた」(『中世仏教思想史研究』二四三頁)といい、そこに十三世紀の天台教団から出た宗教人としての親鸞の限界を見ることができるといわれている。

この批判は、これまでの教学がともすると法の働きに力点をおいていわば「如来からの論理」を追究してきた点を指摘するものと理解できるが、親鸞自身への批判としては的をえたものとはいえないことを、親鸞における教判論の特徴とその意義の考察を通して以下論じてみたい。

二 教の眞実性について

いまこれを論ずるに次の二つの側面が認められよう。

一つは「教の眞実性は、釈尊という歴史的な人格に依ってではなく、却て教自らに依って自証されねばならない」といわれる側面であり、いま一つは「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしと、よきひとのおほせをかぶりて信ずるはかに、別の子細なきなり」と『歎異抄』が伝える如く、教えは「よき人の仰せ」として人格を通さなければ人々に伝わらない、いいかえれば「普通の眞理が実在することは、それを体現した人によって証明される」と指摘される側面である。前者は教証・理証といわれる客観的な証明の問題とし、後者は行証・身証といわれる主體的な証明を問う側面であるといえる。

が、「聖道の諸教は行証久しく廃れ」かつ「外儀は仏教のすがたにて、内心外道を帰敬」する姿を歎く親鸞にあっては、ことに第二の側面において教法の眞実が具体的に確められることが決定的問題としてあったということができよう。それは例えば『讃阿弥陀仏偈和讃』の中で、親鸞は「眞実」

の語に左訓をほどこして、

しんといふはいつはりへつらはぬをしんといふしちといふはかならずものゝみになるをいふなり^③

と記していることから十分窺いうるであらう。

つまり親鸞は教法・仏説の真実ということを、教理の優劣の問題としてではなく、具体的に教法が人間の上にとどう働いているのかを問題にし、自らを依り処としていつわり・へつらわず、真実の自己を実現する力用をもつものとして、また「かならずものゝみになる」すなわち「遇うて空しく過ぐる」ことのない「確かなもの、自己を真に充実させるもの」として、教法の真実を捉えていたとみることができるのである。

三 教判成立の根拠としての信心

右に教の真実性に二つの側面がみられることを注意したが、そのことは、親鸞の明した信心の性格・特質との関連から、さらに理解を進めることができる。そこで注目したいのが、親鸞が『教行信証』の信巻と化巻の二ヵ所に引用した『涅槃経』の信不具足の文である。

(信に) また二種あり。一つには道ありと信ず、二つには得者を信ず。この人の信心、ただ道ありと信じて、すべて得道の人ありと信ぜざらん、これを名づけて信不具足とす

この文は真実の道、生きた仏道は必ず得道の人を生むもの

であることを教えているといえるが、先の教の真実性の二つの側面との関連でいえば、第一の側面はここにいう「道ありと信ず」ることに対応し、第二の側面は「得者を信ず」ることに対応しているとみることができよう。そうすると、親鸞において教の真実性を明らかにすることは、真実の信心を明らかにすることと別ではなかった。道と得道者を信知していく求道の歩みこそが、仏道の真実なることを明らかに信知する営みにほかならなかったといっているのではないか、この点が小論で主張したいポイントである。

いうまでもなく親鸞の信心は二種深信をもつていい尽されるわけだが、その信仰体験は親鸞自身が「しんするこゝろのいてくるはち衆のおこるとしるへし^④」と注意したように、親鸞において教えを信じるということは、単に仏陀釈尊の語った言葉を信じるというのではなく、仏の智慧全体が語りかけてくるその言葉を聞きとること、そして「いづれの行もおよびがたき」わが身にめざめ、それに即して「他力の悲願はかくの如きのわれらがため」と如来にめざめることであった。それをさらにいえば、念仏を称え如来の智慧の名号を聞信する一念に旧き自己から新しき自己に生まれかわる、本来の自己にかえることであると、こうもいえるだろう。

たとえば、『教行信証』後序に「夢告に依りて、緯空の字を改め」たといっているが、善信あるいは親鸞という名告り

の裏には、夢告という如来もしくはその化身の呼びかけを蒙って新しい自己に気づき生まれかわるというような大きな転換が親鸞自身の上に起きたことを、そこから読みとれよう。

「真宗遇い直し」（散善義）といわれるそういう「真宗」真実の教法との出遇い、まことの言葉にふれるという体験は、この夢告がそうであるように、自己の存在の根底をくつがえし、真実なるものに呼びかえす「よび声」を聞くという形で、いいかえれば、善導の二河白道のたとえがよく表わしているように、人格と人格とが呼応する関係において、よく表現しうるものといえるのではなからうか。そういうものならば、教巻に引く『大無量寿経』の出世本懷の文もまた、釈尊と阿難の問答という形で表現されていることに注目することができよう。親鸞はこの文に法然との出遇いの体験を重ねていたのかもしれない。

四 むすび

以上論じたところからいえば、教法の真実（宗教的真実）は人間の知識分別によつては捉えきれないものであつて、ただ一心に教えを聞きそれに信順し生きる人の上に、あるいは自ら教えを生きる身となることの上に、如来の真実は信じられるものである。いうならば、本願の真実が行者を成就した行者が本願の真実を成就し証明するともいえよう。

そして親鸞は、如来の真実が衆生の上に回向せられ信じられることを「如来回向の信心」を語るることによつて明らかにし、如来本願の真実をいかなる人々の上にも開いたのである。

したがって、以上のことから親鸞における教判の意義ということを考えると、たとえば行巻に「一乗海の機を案ずるに金剛の信心は絶対不二の機なり」と正法「絶対不二の教」を正しく受けとめるものは「金剛の信心」であると述べ、あるいは化巻には、

横超とは、本願を憶念し、自力の心を離る、これを横超他力と名くるなり

といわれてあるように、釈迦一代の教化は、我々に自力の心をひるがえし如来の教法を如実に受けとる機たらしめることにあつたのであり、そのように単に仏教教理の優劣を主張するためではなく、求道者の決定的転換を要求する事柄として、親鸞における教判の意義を理解することが重要であると考えるものである。

- 1 稲葉秀賢『教行信証の諸問題』九〇頁
 - 2 早島鏡正「本願思想における道と得道者」（『大乘菩薩道の研究』二九八頁）
 - 3 定本親鸞聖人全集第二巻八頁
 - 4 同右一四五頁
- （ハキーワード） 教判論、行証、真実教

（電谷大学大学院）